

大山の廢屋記

呉 谷 充 利

志賀直哉と大山

志賀直哉が大山に足を運んだのは大正3年の夏である。このとき彼は「蓮浄院」と呼ばれる宿坊の離れを借りている。この十日ほどの大山の生活が「暗夜行路」の最後の場面に描写されている。雄大なその風景とそこにおける主人公を描いてこの小説は終わっている。この長編小説の大団円となる舞台、31才の直哉がしばらく滞在したその宿坊を筆者は眼にしたかった。

というのも、松江から大山へと赴いた彼は、このあと勘解由小路資承の娘康子を妻とし、翌年、赤城山大洞の仮の住まいから我孫子弁天山に居を構え、そこで暮らす。この時の大山の生活は直哉の将来を決する転機ともみれ、この宿坊の体験は彼の人生において重要な意味をもつと思われたからである。大山の自然的体験は彼の生活思想にどんな影響を与えたのか。「暗夜行路」の終幕を担ったその描写は彼の世界観を理解する一つの鍵であるようにも思われた。大山に行ってみたかった筆者の気持ちはこんなところにあっただろうか。

蓮浄院

「蓮浄院」の番号案内に出た電話はつながらなかった。ようやく予約した山麓のホテルのフロントから、観光案内の窓口を教えられ、「洞明院」というもう一つの宿坊を紹介される。その宿坊は、蓮浄院のことをよく知っているという。状況がわかる。蓮浄院は現在閉められており、宿坊の住職に先立たれた夫人岸本富美子さんは既に尚寿園という老人ホームに入っているということである。当の宿坊の離れは手が入って、元のものとは変わっていると聞かされる。「いろいろ、ありましてな」この言葉が耳に残る。

蓮浄院のことを知るためにはこの夫人の協力が是非とも必要であった。夫人に電話を試みようと考えた。電話口に出た彼女の口調は未だしっかりとしたものであった。もう寝たきりにでもなって、話をすることさえ難しいかもしれないと思っていたので、このとき筆者は随分安心したことを憶えている。「いつですか」とおっしゃる。「12日です」と言う。電話をしたのは10日で考えてみれば急な話であった。

約束の前日、直哉が乗った山陰線ではなく新幹線で岡山まで行き、伯備線で米子に下車

した。そこからタクシーで30分ほどで宿に着いた。3時まえだった。荷物を解いて宿から遠からぬ「蓮浄院」を外からだけでも見ようとタクシーを呼ぶ。が、もう訪ねる人も途絶えたのか、運転手はその場所を知らなかった。ようやく、看板にその名を確かめた宿坊は大山に向かう石段の横にひっそりと佇んでいた。本堂も離れも草の生い茂る廃屋



[写真-1]
蓮浄院の離れ（現況）[平成9年9月11日撮影]

となっている。その姿を写真におさめる [写真-1]。見れば、離れの方は一部新しい木で直されている。

霧

石段は大山への登山口であった。4時であった。登っていけば山頂である。深い木立のなかを歩いて行く。途中、下山する二組の夫婦とすれ違う。志賀直哉もこの道を登ったにちがいない、そんなことを思いながら石段の道を歩いて行く。ブナの林であった。道は段々きつくなる。下着は汗ですでに濡れたようになっていた。霧が出る。流れてくる。それは徐々に林のなかに立ちこめてくる。こんな霧を直哉は何と受けとめたのであろう。1時間ほど登った。看板を見ると六合目である。遠望の説明書きがしてある。が霧で見えない。

フランスのルーアンを訪ねたことがある。もう17年ぐらい前のことである。ルーアンは中世の街並をいまに残す美しい街として知られる。この日、ルーアンには深い霧が立ちこめていた。11世紀末に着手され16世紀に完成したというカテドラルはその深い霧に包まれ、尖塔を隠していた。まさに、天に届いたゴシックの聖堂が現われていたのである。霧は天を暗示していた。このとき、曇天の北方に咲いたゲルマンの文化の原点を筆者は見たのかもしれない。

永井荷風の『ふらんす物語』の一節に「霧の夜」がある。時は、1907年の年末のリヨンの夜、深くたち込める霧のなかに、荷風は生きる人間の魂への憐憫をやるせない哀切をもって描きながら、「あの暗い窓からは己が女房を絞殺してその金を奪い取った泥酔の亭主の真青な顔が現れべき筈だ……」とボードレルの詩に寄せながら、その夜を綴る¹⁾。

こうした西欧に見る霧のスティムング²⁾は一つにはターナーの絵画に見事に表現されて

いる。『雨、蒸気、速度』(1844)³⁾と題するにおいて彼は、突き進んでゆく列車のダイナミズム、この19世紀浪漫主義の一つの激情を雨と蒸気に煙る大気のなかに描く。

また近年において西欧に思索し、帰らなかった森有正は、冬の朝、灰色の空の下に灰色の霧に包まれるノートル＝ダムやサン・ルイ島を見ながら、内面へと向かうこの季節のことを語っている⁴⁾。彼はその霧の朝の薄明にデカルト、パスカル、ルソー、モンテスキュー、ジード、サルトル、カミュの名を綴る。

「暗夜行路」の大山の一夜

大山の霧を直哉はいかに受け止めたのであろうか。「暗夜行路」の主人公の心持は大山の自然に溶けていく。彼の肉体も精神もそこに溶かされて一つになっていく。直哉は小説のなかで宿坊にかかる霧について書いている。

彼は起きて、自ら雨戸を繰った。戸外は灰色をした深い霧で、前の大きな杉の木が薄墨色にぼんやりと僅にその輪郭を示していた。流れ込む霧が匂った。肌には冷々気持がよかった。雨と思っただけの濃い霧が萱屋根を滴となつて伝い落ちる音だった。

宿坊に流れ込む霧の匂いと肌に刺す冷気の心地よさ、それは皮膚感覚をもって描写される。山中にかかる霧と西欧の都市にかかるそれを単純に比較することはできないにしても、霧のスティミングの違いはここに明瞭であろう。

主人公時任謙作は大山の御来迎を求めて、大阪の会社員達と連れ立って深夜寺を出る。が、昼飯の鯛の焼物にあたっては、彼は萱の繁った中腹で登頂を断念し、一人休む。その疲労の極地はしかしながら彼に不思議な陶醉感となって感じられていく。

彼は自分の精神も肉体も、今、この大きな自然の中に溶込んで行くのを感じた。その自然というのは芥子粒程に小さい彼を無限の大ききで包んでいる気体のような眼に感ぜられないものであるが、その中に溶けて行く、一それに還元される感じが言葉に表現出来ない程の快さであった。何の不安もなく、睡い時、睡に落ちて行く感じにも多少似ていた。

このときの大山の風景を直哉は次のように書いている。

静かな夜で、夜鳥の声も聴えなかった。そして下には薄い霧^{もや}がかかり、村々の灯も全く見えず、見えるものといえば星と、その下に何か大きな動物の背のような感じのするこの山の姿が薄く仰がれるだけで……。

大山は薄い霧^{もや}のため何か大きな動物のように見える。眠りから覚めると、薄明の夜明け

である。

星はまだ姿を隠さず、数だけが少なくなっていた。空が柔かい青味を帯びていた。それを彼は慈愛を含んだ色だと云う風に感じた。山裾の霧は晴れ、麓の村々の電燈が、まばらに眺められた。米子の灯も見え、遠く夜見ヶ浜の突先にある境港の灯も見えた。或る時間を置いて、時々強く光るのは美保の関の燈台に違いなかった。……

大山の夜は次第に太陽の光りに覚醒していく。志賀直哉の文章は陶酔から覚める風景を力強く描いている。描写は小説の虚構ではない。そこには大山の宿坊生活における新鮮な感覚が生きている。彼はこの大山の描写を次のように述懐している⁵⁾。

後編の最後の大山の朝景色は二十四年前行ったきりの場所で、うまく書けるかどうか、書くまでは不安であった。若し季節が同じなら、もう一度見に行ってもいいと思ったが、小説では夏なのに書いていた時は冬だった。高い山の雪景色では仕方がなかった。然し書いて見たら、前の印象が深かった為めか、案外はっきり頭に浮んでくれたので大いに助かった。とにかく、気持ちがそれにすっかり入り込めたのは大変嬉しかった。

小説に戻ってみると、そもそも大山への旅は妻の不義に苦しんだ主人公が自分の気持を純化するためのものであった。電報を受けてかけつけた妻と主人公を彼は次のように書いている。

直子は口を利くと、泣出しそうなので、只點頭いていた。謙作は尚、直子の顔をしきりに眺めていたが、暫くすると、「私は今、実にいい気持なのだよ」と云った。「いや！そんな事を仰有っちゃあ」直子は発作的に思わず烈しく云ったが、「先生は、なんにも心配のない病気だと云っていらっしゃるのよ」と云い直した。

謙作は疲れたらしく、手を握らしたまま眼をつむって了った。穏かな顔だった。

大山のスティミング

こうした主人公の内面の世界に浸透する大山の描写は即興的な自然描写に留まるものではない。そこには主人公の最も深い内面の精神に触れる大山霊場の一つのスティミングが存在している。そのスティミングは小説のなかで甘美な陶酔感をもって述べられる。この陶酔感のなかに主人公の精神も肉体も巨大な自然の中に溶込んで行く。精神の苦悶、肉体の疲労感さえも包みこむ大山の心地よい精気を謙作は感じる。ここにおいて、謙作の思考的生命は停止する。大山の霊気は彼の思考的精神を溶かし込んでいくのである。

「暗夜行路」の終章に登場するこうした大山のスティミングは、例えば地中海を臨むギリシアの「真昼」の精神といかに対蹠的であるか。ギリシアの真昼の精神は、その大気からすべての不透明なもの、模糊たるものをそぎ落としてヴォリュームの稜線を真昼のその

光のなかに裁断する。ギリシアのテオリアはまさにこの地中海の光の賜物であった。

こうした見方から考えてみると、謙作が眼下に見た大山の霧は、象徴的な意味あいを含んでくる。遠く現実、まどろむ意識という決定的な終章の描写のなかに主人公の謙作が逢着した魂の場所として大山が語られるからである。直哉は、この最後の場面において主人公の思考を停止しながら、なお生命のぎりぎりの輝きを述べている。大山の霧のなかに思考的意識は停止し、いわば生命は無限の大きさに解き放たれている。その霧はまた流れ込む霧となり、透明な滴となって宿坊の萱屋根を伝って落ちたのである。

大山の霧、それは永井荷風がリヨンの夜に、また森有正がパリの朝に見たものではなかった。これらはむしろ思考的生命をある浪漫的感情のなかに覚醒している。そうした西欧の霧に対する独自の意味を「暗夜行路」の大山の一夜は語ってはいないか。とすれば、志賀直哉のこの文学作品は優れて文化論的な示唆を含む日本近代の一つの証言としてこれを見なければならぬ。こんなことが妄念のように筆者の頭を巡っただろうか。

六合目まで登ってみると、時計はすでに5時を回っていた。登山口の「眺海荘」という名の土産店の近くに待たせたタクシーとの約束の時間が迫っていた。しばらく遅れた。もう少しで帰るところであったという。

廃屋の宿坊

翌日、尚寿園を訪ねる。約束の11時、玄関先でタクシーを止めたまま待つ。しばらくすると、若々しく身なりを整えた老婦人が現われる。住職に先立たれ、一人身になったこの夫人は町の勧めでその老人ホームに入り、もう3年ほどになるという。蓮浄院はその日から廃屋になった。時々彼女がそこに戻ることはあるにしてもである。

この日は雨であった。夫人は少し不自由な足を時々引きずるようにしながら、隣家の宿坊（洞明院）にあずけていた雨戸の鍵を受け取って、そこを開けてくれた。大きな円窓のある畳敷きの部屋がそこにあった。直哉が借りた部屋であった。部屋は荒れ、床の間の付いている方の壁には修理の手が入っていた。修復であるということである。蓮浄院のこの離れの円窓のある部屋と仕切られる隣室には炉が切られており、見上げた天井は太い頑丈な小屋梁の架かる檜首構造⁹⁾の民家の屋根裏になっている。

突然、人気のない廃屋に騒々しい賑やかな声が響く。電源が入り、消し忘れたTVが鳴り出したのである。湿気と雨のせいで庫裏の茶の間の床はすでに一部崩れている。ビニール袋から数冊の雑誌が出てきた。「蓮浄院の離れ」の近い記録であった。そのなかに、直哉から届いた一葉の葉書が挟まっていた [写真-2]。

大山の廃屋記

お眼にかかって四十二、三年になります。御達者でなりよりです。先日松江鳥取へ参りましたが御地にはお寄りできませんでした 昨日新宿伊セ丹百貨店から粗品お送りさせました お受取り下さい 草々

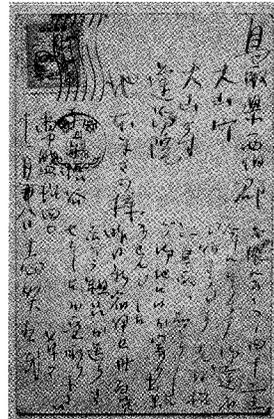
十一月八日 志賀直哉

葉書は渋谷常盤松の自宅から出されたものであった。スタンプから昭和31年に投函されたものであることがわかる。

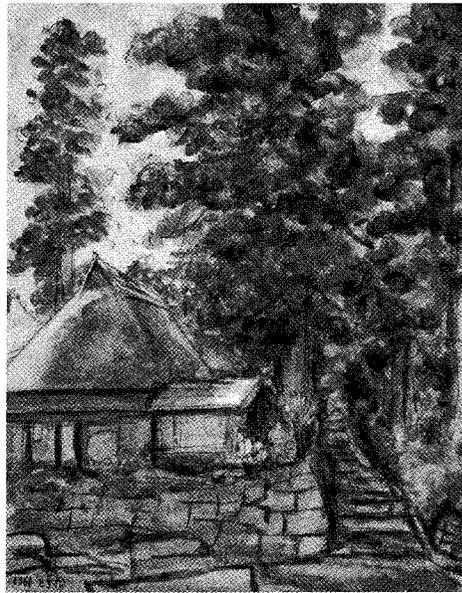
夫人は、もう一つ何かを仕切りに探してくれる。「私も大事なものがどうかということとはちゃんとわかっていますから……ぞんざいにしていないはずなんです……」が、このものは結局出てこなかった。筆者の想像するところ、それは『宿帳』ではなかったか。志賀直哉が記帳したはずの、また後には湯川秀樹夫妻なども訪れたというその記帳録である。

開かない茶の間の引き出しを前にした筆者に夫人は「破って下さい。どんなにしても構いません……もう戻る積りはありませんから」と言う。離れの広い土間の玄関の正面に掲げられていたこの宿坊の離れを写生した水彩画を外して尋ねると、それは直哉が宿泊した当時の姿を描いているという【写真-3】。サインには1960.8.3としてある。「絵の好きな人がいましてな」「誰が描いたのですか」「知りません」筆者は志賀直哉逗留の後、この宿坊の辿った運命のことを考えた。「もう棄てました」夫人から吐かれたその言葉が廃屋に残った。残されていたこれらの資料を筆者は手にすることになった。

そとは雨混じりの天気である。帰り際、もう一度この宿坊の写真を撮った。ふと見ると、夫人はこの建物に手を合わせていた。眺海荘の2階で簡単な昼食を取って、尚寿園に戻った。2時すぎであった。尚寿園の玄関先で夫人は筆者をずっと立って見送ってくれた。



【写真-2】
志賀直哉から蓮浄院に
届いた葉書（昭和31）



【写真-3】
蓮浄院の玄関土間に掛けられていた水彩画
（サイン1960.8.3）

蓮浄院の記録

ビニール袋に入っていた雑誌の記事から、蓮浄院の二三の記録を拾い集めてみる⁷⁾。十数年前（昭和48年当時）松江に旅した直哉に米子市長が大山への再訪を懇請し、蓮浄院でもその訪れを待ったが彼は結局大山に来なかった。「大山はなつかしいが、以前と変わっているはずだし、それを見るのは辛い」という理由であったという。が記事によればこの時（昭和48年当時）蓮浄院はなお大正初年の姿を保持している。落胆した直哉逗留当時住職の妻であった（池本）まさのさんに前述の葉書がしばらくして直哉から届いたのである。

週れば、この建物は江戸時代中期のものになるという。この宿坊の傷みがはげしく修理が必要になるのは、平成3年9月に上陸した台風19号による損壊のときである⁸⁾。新聞記事は修理のために解体される蓮浄院の離れの写真を載せている。窮状を訴えた夫人の声にこたえて、篤志家による修復がなされた。このとき、付属の便所部分などは取り壊され、現況の姿が残されたのである。

この修復は、蓮浄院の離れの修理がままならず、「志賀先生に申し訳ない」と嘆き、訴えたこの夫人の切なる思いに動かされた善意によるものであった。筆者はこのことを知ったとき、いかに安堵したか。が同じ夫人が吐いた「もう棄てました」という余りにも隔たったふたつの言葉のあいだにいったい何があったのか。それはわからなかった。他人が踏み込めない深い心理がそこに働いたのかもしれない。

残影から思い出へ

ところで、当の直哉はこうした自身にまつわる文学史蹟や記念館の類を拒否している。城崎には彼の文学碑が尾道には旧居が残されているが、彼はこれに賛意を示さなかったといわれる。このようなことを考えてみると、直哉自身は夫人の心労をねぎらってそれを無用のこととしたのかもしれない。実際、志賀直哉他界のあと、彼を偲ぶ書の展覧会⁹⁾と没後十年の志賀直哉展¹⁰⁾が主だったものとしてわずかに開かれただけである。

記念館に対する彼のかたくな態度の真意は一体どこにあったのか。直哉は自身の記念館に死の博物館をあるいは見たのかもしれない。並べられる陳列品は、彼にとってみれば生命を失くした残骸でしかなかったのかもしれない。こうした想いに駆られてみると、眼の前で無残に朽ちたその姿に筆者は一人の人間がなした言いようのない真実をかえって見たのである。

戻らぬ時への望郷と時の流れに隔てられた今このときがここに在るだけであった。過ぎ去り続けていく時の流れにそれはどこまでも遠のいていく。がその残影はやがて一つの精神となって思い出として逆にこちらに迫ってくる、歴史の真の意味を筆者はそこに見るような気がした。

以上、平成9年の夏、この廢屋に佇んだ者のせめてもの記録として、「暗夜行路」の終章

大山の魔屋記

を飾る大山への讃歌とそのふもとにあってこの作家を育んだ一宿坊への哀惜をここに綴った。

注)

- 1) 永井荷風：ふらんす物語 新潮文庫 昭和50 注解
- 2) Stimmung (独)：気分、情趣、雰囲気の意
- 3) ロンドン・ナショナルギャラリー
- 4) 森有正：思索と経験をめぐって 講談社学術文庫 昭和51
- 5) 志賀直哉：暗夜行路 新潮文庫 平成7 あとがき
- 6) さす構造と読み、草ぶきの民家などに特徴的に見られる棟木を支えるための合掌形の斜材による小屋組のことである。
- 7) この部分は『太陽 1973 2月号 特集 志賀直哉 暗夜行路の旅』による。
- 8) 以下の部分は新聞(平4.9.27,平4.10.1 社名不詳)の二つの切抜き記事の保管コピーによる。
- 9) 「志賀直哉を偲ぶ書画展」 昭和46.12.15～12.25 於吉井画廊新館
- 10) 没後十年「志賀直哉展」 昭和56.9.12～28 於西部美術館

文中、志賀直哉：暗夜行路 作品出版 新潮文庫 平成7による。

参考資料

- 1) 新潮日本文学アルバム 志賀直哉 新潮社 1995
- 2) 志賀直哉 現代日本文学アルバム 学習研究社 昭和49

[写真-1], [写真-2], [写真-3] : 筆者撮影